

親子のやる気 親の気づき

〇〇53

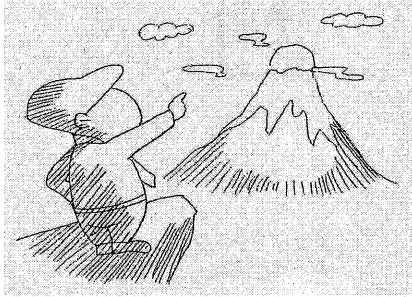


大震災から1カ月がたとうとしています。先日の夜も八戸の市街地は震災前と比べ、真っ暗でした。ネオンが消え、街角を明るく照らしてきたコンビニの多くが夕闇迫るころには休んでしまいます。そういうえば、私が幼いころ、汗だくになって

自由自在

遊んだ後、近所の子どもたちだけで銭湯に向かうとき、長兄が懐中電灯を持っていて、すっかり日が落ちた公園の入り口に立つポプラの大木のとっぺんを照らしたり、星まで届けとばかりにサーチライトのように夜空に向けて、ドキドキワクワクしたりしながら夜道を歩いたものです。1980年ごろ、私たちは上京するにも8

豊かな社会実現夢見て



by yoriko

大震災経験、前進する志を

時間以上かかっています。益喜れの混雑はるかかなたの海外、デジタル化やグローバル化という豊かな未来を自指した時代が確かにありました。しかし、この30年ほどで東京が近く、世界が狭くなっていくに当たって、私たちは「地域」に対する帰属感が薄れてきたと思います。近い・早い・安いという合理的な生活が、「地域」に伝わる祭りや遊びを日常生活から遠ざけたような気がします。物的豊かさへの希求は心の空白感をもちますと言われていますが、最近の道徳教育や感性を育てたいという子育てへの期待感はその一端かも知れません。今年度の青森県立高校入試は震災の影響で後期入試を予定より2日遅らせ、先月20日の合格発表で終了しました。子どもたちは自分の夢に近づくために「行きたい高校」を志望して受験に臨んでいるはずですが、現実には明確な夢を描けず、もがき苦しみ、取りあえず「結論先送り」の高校進学になることが少なくありません。そのためか年々普通科志向が強くなっています。どうも美業科へ進む子どもたちの思いは、親の世代とはかなり異なっているようです。永遠とは生命の持続で割も増えました。これは本年度から募集を停止した南高の定員200人分が実業科へは流れず普通科へ向かったからだと思われまます。それぞれの中学校で考えば、学年の6割以上が普通科を「行きたい高校」と考えている現実が見えてきます。このたびの大震災では、ゆとり教育世代の子どもたちも目の前に広がる惨状から、平和な暮らしや健康な人生という先人が太古から求めてきた夢の実現を「リアル」に体感できているのではないのでしょうか。心に響く「頑張る」の掛け声に、絶望から希望を感じ、永遠とは生命の持続で

八戸地域の県立高校9校の志願者数は昨年度2262人、本年度は少子化の影響で2153人に。そのうち八高、北高、東高、西高の普通科志向の志願者数は昨年度が全体の51・9%、本年度が全体の61・6%と約1長)

一人親家庭の子を「先輩」家庭教師サポート

一家庭教師首都家庭教師生らたかに寄んで始人宿区さん(三)離婚光本った「10発し、な気と言て親うに境遇できた二で低一人組むた。人の代。一にも「ア語で言」言、めたまじっ不満

逃げるときは身軽に

な負担が掛かります。男女に関係なく6年生以下の子なら、少なく

す。手提げバッグについて

ては、ただ投げ捨てるだけでなく、場合によ

っては相手の顔を白けて投げ付けること大切です。人間は顔向かって飛んで来ることがあれば、とっさにかがめたり、目を離

子どもの安全科学